

川崎英明教授・永田秀樹教授・ 荏原明則教授 退任記念論集に寄せて

法政学会副会長・司法研究科長 野 田 輝 久

2019年3月末日をもって、私たちが深く敬愛する川崎英明先生、永田秀樹先生、そして荏原明則先生が本学を定年によりご退職されました。私たちは、先生方のご在任中のご活躍と法学部・司法研究科への多大なご貢献に感謝し、ここに「法と政治」の本号をご退任の記念論集として編纂し、先生方に奉呈させていただくことにしました。

川崎英明先生は、大阪大学大学院法学研究科修士課程に進学された後、大阪市立大学大学院法学研究科博士課程を経て、1979年4月に島根大学文学部講師に就任され、1982年同助教授、1991年同教授へと昇任され、2001年4月より本学法学部教授に着任されました。その後、2004年4月に司法研究科の開設とともに同研究科に移籍され、以来15年にわたり、司法研究科の発展・優秀な法曹の輩出に多大な貢献をされました。この間、川崎先生は、2012年4月から2年間司法研究科長を務められ、法科大学院制度が創設当初の制度設計からの修正を余儀なくされ、法科大学院を取り巻く環境が徐々に厳しさを増す中において、司法研究科の先頭に立って、その存続・発展のために、まさに献身的にご尽力されました。

川崎先生のご研究の中心は、ご専門である刑事訴訟法の中でも、特に被疑者と被告人の権利主体性の保障をモチーフとした制度論・解釈論です。

先生の最初の単著である『現代検察官論』（日本評論社、1997年）においては、このモチーフを基礎として、「検察の民主化」、「市民の代理人」としての検察官像を追求しておられます。さらに、同様の視点から、刑事弁護の領域についても熱心に取り組まれており、刑事弁護人にとって非常に参考になるご業績も発表しておられます。また、このような視点の延長線上にある問題としての刑事再審制度についてもご研究されており、その成果は『刑事再審と証拠構造論の展開』（日本評論社、2003年）に結実しています。近年では、これまでのご研究のいわば集大成ともいえる『刑事司法改革と刑事訴訟法学の課題』（日本評論社、2017年）において、戦後の刑事司法の問題点を歴史的に考察されたうえで、裁判員制度の導入や検察制度の改革等に焦点を当てて、その問題点や課題を抽出・検討・考察されています。

教育面においても、川崎先生は、2004年3月まで、法学部・大学院法学研究科（博士前期課程・後期課程）において、学生指導に携わってこられ、さらに同年4月からは司法研究科において、将来の法曹を目指す学生のために熱心な指導をしてられました。既述の川崎先生のご研究のモチーフあるいは理念は、理論と実務の架橋を目指す法科大学院教育においてこそ、遺憾なく発揮されたものと思います。さらに、先生は、『法科大学院ケースブック刑事訴訟法』（日本評論社、2004年）等の法科大学院教育の充実に資する基本書・演習本についても編著者として執筆・公刊されており、本学法科大学院の教育に対しても多大なる貢献をしてられました。

川崎先生の本学法学部・司法研究科に対する多大なるご貢献に感謝申し上げます、これからも私たちにご指導・ご助言をお願い申し上げますとともに、先生のご健勝とご活躍を祈念いたします。

永田秀樹先生は、京都大学大学院法学研究科（公法専攻）修士課程・博
2(772) 法と政治 71巻2号（2020年9月）

士課程、そして同大学法学部助手を経て、1980年に大分大学経済学部講師に就任され、1982年同助教授、1993年同教授へと昇任され、1999年4月に立命館大学国際関係学部教授に移籍された後、2004年4月の法科大学院開設と同時に本学大学院司法研究科教授に就任されました。以後15年わたり、司法研究科の存続・発展にご尽力されました。この間、1995年にドイツ・ミュンスター大学において客員研究員を務められるなど、国際的な活動も展開しておられます。さらに、2016年から2年間、司法研究科長を務められました。法科大学院制度が大きな転換期を迎えようとしているこの時期に研究科長に就任され、西宮北口キャンパスへの移転を決断され、研究科内での意見集約や大学執行部との調整等に奔走されました。さらに、永田先生が研究科長に就任されたこの時期は、司法研究科自体の規模の縮小や教員の入替わり等、大きな節目を迎えた時期であり、このような内外の状況にあって、永田先生は司法研究科の舵取りを的確かつ精力的に行われました。この永田先生の、さまざまな意見を持つ人たちの間に立ってその意見を聞き、最終的には誰も不快な思いをしないようにするという卓越した調整能力は、後に続く私たちの範となるべきものです。

永田先生のご研究は、ドイツを中心とするヨーロッパの憲法裁判比較です。とりわけ、ドイツ基本法およびドイツ憲法裁判所の違憲審査制度にはご造詣が深く、ドイツにおける基本権解釈学における三段階審査論を最も早い時期に日本で紹介しておられます。『現代ドイツ基本権』（法律文化社、2001年。新版は2019年に刊行）は、ドイツにおける憲法の定番教科書の翻訳書ですが、これについても、永田先生のドイツ憲法（基本法）および憲法裁判所の成立過程や時代背景に関する詳細かつ緻密な分析を通じた正確な理解があってこそ、現在におけるまでドイツ憲法に関する研究書として、他の憲法学者の業績において引用され続けているゆえんであるといえます。

永田先生は、学生に対する教育の面でも非常に熱心に指導されていまし

た。とりわけ、特別演習という科目においては、事例問題について学生が起案した答案に対して、適切かつ非常に丁寧な添削を行なっておられ、永田先生の添削指導を受けたい多くの学生が、聴講という形で演習に参加していました。さらに、そのような先生の懇切丁寧な指導が評判となり、オフィスアワー以外の時間まで、学生が先生の研究室に押しかけて、論文等の指導を受けている姿がしばしば見られました。永田先生の熱心な指導により、多くの優秀な学生が本研究科から輩出され、現在法曹として活躍しています。また、法科大学院教育のための教材という面でも、永田先生は、数多くの基本書や演習書を編集・執筆されており、また独自の教材集も作成しておられます。

永田先生は、サイクリングと写真撮影という趣味をお持ちで、撮影された写真を本研究科のパンフレットやホームページに提供していただくこともしばしばでした。2018年9月には『関学の四季』（関西学院大学出版会）と題する写真集まで出版されるなど、その腕前は玄人をも凌ぐほどで、私たちも感動させていただきました。

永田先生のこれまでの法学部・司法研究科に対する多大なるご貢献に感謝申し上げますとともに、先生の今後のご活躍・ご健勝を心より祈念申し上げます。

荏原明則先生は、東京教育大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程、筑波大学大学院社会科学研究科博士過程を経て、1980年に神戸学院大学法学部に就任され、1983年に同助教授、1990年に同教授（同大学大学院法学研究科教授を併任）へと昇任され、2004年4月に本学大学院司法研究科教授に就任されました。この間、米国のアイオワ大学ロースクールの客員教授も務められました。荏原先生は司法研究科内において教務関係委員長をはじめとする数多くの委員（長）を務められ、まさに縁の下の力持ち的な

4(774) 法と政治 71巻2号 (2020年9月)

存在として、司法研究科の存続・発展を支えられました。さらに、先生は、学外において多くの役職に就かれており、たとえば、明石市情報公開審査会委員・会長（1992年6月～2008年5月）、兵庫県開発審査会委員・会長代理（2002年12月～2019年3月）、日本災害復興学会理事（2008年1月～2015年1月）などを歴任しておられます。

研究面において、荏原先生は、行政法の中でも行政機関による規則制定に関する諸問題を扱ってこられました。特に、米国法を比較法の素材として選択され、同法における Rule Making を詳細に分析・検討され、わが国における制度との比較や接合可能性について、緻密にかつ意欲的に論じたものとして、学界においても高く評価されています。そして、荏原先生は、筑波大学から法学博士号を取得されています（題目「行政過程への参加—アメリカにおける Rule Making を中心として—」）。さらに、荏原先生は、公共施設の利用および管理に関する行政法上の問題点に対しても大きな関心を持たれ、米国法との比較においてこれを詳細に論じておられます。『公共施設の利用と管理』（日本評論社、1999年）と題する単著は、この問題を総合的に論じた先生のご研究の成果として刊行されたものです。また、同一の問題意識に基づいてさらにご研究を進められ、「都市計画法32条に定める公共施設管理者の同意」（同志社法学67巻2号（2015年）1頁）等のご論稿も公表しておられます。

教育面においても、荏原先生は、司法研究科において環境法を含む行政法関連科目についての講義や演習を通じて、学生に対して熱心に指導をしてこられました。演習科目については、学生との双方向での議論を通じて、行政法に関する基礎知識や司法試験の論文式問題に対応できる能力のブラッシュアップに努められ、文章指導という面でも、丁寧な添削指導をしてくださいました。また、大学院法学研究科においても、土地や河川の利用に関する日米の比較をテーマとして、学生に指導をされていました。非

常に質の高い授業であると、学生からは高い評価を受けていました。

荏原先生からは、さまざまなことを勉強させていただきました。ですが、残念ながら、2019年4月14日に、荏原先生はご逝去されました。私たちが荏原先生からご指導を受ける機会を失ったことは、本当に残念でなりません。改めまして、ここに荏原先生のこれまでの法学部・司法研究科に対する多大なるご貢献に対して、感謝申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。